

*THE FOUR ZOAS*における
EMANATIONSの役割

— BLAKEの‘CONTRARIES’の観念を通して —

山 崎 有 介

THE FOUR ZOASにおけるEmanationの役割

— BLAKEの‘CONTRARIES’の観念を通して —

山 崎 有 介

(一)

ウィリアム・ブレイク (William Blake, 1757-1827) の初期の詩集『無垢と経験の歌』(*Songs of Innocence and of Experience*, 1794) において、その副題に記した“Shewing the Two Contrary States of the Human Soul” (人間の魂の2つの相反する状態を示して) によって、彼の“Contrary”の観念がはじまることになる。やがて、この“Contrary”は単に‘Innocence’〈無垢〉と‘Experience’〈経験〉という範疇にとらわれることなく、〈人間の魂〉への分析として考えうるあらゆる状況に応じて表現されてゆくことになるのである。その表現手段としてブレイクは独自の神話を作り上げ、人間の複雑な精神のうごめきを描くことにしたのであった。『アルビオンの娘たちの幻想』(*Visions of the Daughters of Albion*, 1793) そしてそれに続く『アメリカ』(*America, a Prophecy*, 1793) にはじまるランベス・ブック (Lambeth Books) と呼ばれる初期の予言書によって、ブレイクは新約聖書の『黙示録』にヒントを得た〈四つの生き物〉、すなわちFour Zoas (Urthona or Los, Luvah, Urizen, Tharmas) を創造したのである。この〈四つの生き物〉には、それぞれ〈四つの女性なる分身〉、すなわちFour Emanations (Enitharmon, Vala, Ahaniah, Enion) が存在し、Zoasの“contraries”として活躍するのである。

〈四つの生き物〉は『ヨハネの黙示録』に次のように描かれている。

6 καὶ ἐνώπιον τοῦ θρόνου ὡς θάλασσα θαλίη ὁμοία κρυστάλλῳ.

Καὶ ἐν μέσῳ τοῦ θρόνου καὶ κύκλῳ τοῦ θρόνου τέσσαρα ζῶα γέμοντα ὀφθαλμῶν ἔμπροσθεν καὶ ὀπίσθεν. 7 καὶ τὸ ζῶον τὸ πρῶτον ὅμοιον λέοντι καὶ τὸ δεῦτερον ζῶον ὅμοιον μόσχῳ καὶ τὸ τρίτον ζῶον ἔχων τὸ πρόσωπον ὡς ἀνθρώπου¹ καὶ τὸ τέταρτον ζῶον ὅμοιον ἀετῷ πετομένῳ.

(ΑΠΟΚΑΛΥΨΙΣ ΙΩΑΝΝΟΥ 4:6-7)

And Before the Throne there was a sea of glasse like unto Chrystall: and in the middest of the throne, and round about the Throne, were foure beastes full of eyes before and behinde.

And the first beast was like a lion, and the second beast like a Calfe, and the third beast had a face as a man, and the fourth beast was flying Eagle.

(Revelation 4: 6-7)

(訳) 御座の前は、水晶に似たガラスの海のようにであった。御座のそば近くそのまわりには、四つの生き物がいたが、その前にも後ろにも、一面に目がついていた。第一の生き物はししのようにであり、第二の生き物は雄牛のようにであり、第三の生き物は人のような顔をしており、第四の生き物は飛ぶわしのようにであった。

(「ヨハネの黙示録」 4章6-7節)

ブレイクが用いている“Zoas”はギリシャ語‘ζωα’に由来するもので、本来複数形である ζωα にさらに’s’を付したものである。そして、聖書の〈四つの生き物〉のイメージと彼独自の人間の性質を四つに分析したところからできあがったものなのである。この人間の性質の四つの分析はすでに、『無垢と経験の歌』においてなされていた。すなわち、「人間の抽象観」(『無垢』)と「神の姿」(『経験』)で、〈人間の魂の2つの相反する状態〉が、(Mercy/Cruelty, Pity/ Jealousy, Peace/ Secrecy, Love/Terror) という具合にさらに4つに分析されていたのである。

Mercy	Pity	Peace	Love
a human heart	a human face	the Human dress	the Human form divine
Cruelty	Jealousy	Secrecy	Terror
hungry Gorge	a Furnace seal'd	forged Iron	a fiery Forge

つまり、ブレイクの〈Four Zoas〉が、〈四つの存在〉を表すものではなくて、〈ひとりの人間の中にある四つの性質〉を示したものであることを暗示するものである。そして、Emanations (女性なる分身) もZoasの中に元来は存在したものであると考えられるわけである。

(二)

Emanationsの元祖はアダム (Adam) の肋骨から生まれたイブ (Eve) である。

主なる神は人から取ったあばら骨でひとりの女を造り、人のところへ連れてこられた。そのとき、人は言った。

「これこそ、ついにわたしの骨の骨、わたしの肉の肉。

男から取ったものだから、これを女と名づけよう」。

(「創世紀」 2: 22-23)

プラトンの『饗宴』(Symposium)に描かれる人間の分裂と同様に、本来の人間は男女の区別のない一つの存在であったことを示すものである。ブレイクはさらにひとりの人間の肉体と同時に、精神の中に目を向け、女性なる分身Emanationsを造りあげたのである。そして、この〈女性なるもの〉は〈男性なるもの〉に対しての“contrary”でなければならないのである。

ブレイクの作品に登場する女性には常に男性との関わり合いの中で描かれている。中期予言書と言える『四つのゾア』は〈女性なるもの〉の役割を知るうえで重要な作品と考えられる。『四つのゾア』は1795年から1804年の間に執筆されたが、原稿は残っているものの出版されることのなかった作品であった。当初の題名は、*Vala or the Death and Judgement of the [Eternal del.] Ancient Man : a Dream of Nine Thoughts*であったが、後に、*The Four Zoas : The torments of Love & Jealousy in The Death and Judgement of Albion the Ancient Man*と改題されたのである。初めの題名にはZoasという文字は出てこない。主たる名前はValaである。Valaは先にも述べたようにLuvah (the Prince of Love) のEmanation、すなわち、〈女性なるもの〉である。女性が題名に用いられるのはブレイク最後の予言書『ジェルサレム』(Jerusalem, 1804-20) はもちろんのこと、初期の予言書でも何度か見うけられるものである。

『四つのゾア』は当初の題名にあるように、9つの夢で構成されている。しかしながら、出版されていないこともあって様々な原稿が残っており、物語として解釈するのは困難を要するものとなっている。ただ、ブレイクの作品が“contraries”によって構成されているものであり、時間と空間の世界が、常に現在と未来、そしてmacrocosm (外なる宇宙) とmicrocosm (内なる宇宙) とが交錯したものであることを踏まえるならば、作品の意図も見えてくるのである。『無垢と経験の歌』が詩集と詩集との対比にその意図があったのではなく、一つの詩の中に相反する世界が隠されていたように。

(三)

土屋繁子氏は、『ヴィジョンのひずみ』(1985)の中で、『四つのゾア』の構成を次のように分析している。

「第1 — 6夜」 人間のヴィジョンの墮落

アイデンティティの喪失と墮落した世界の願望

「第7、8夜」 回復への努力

「第9夜」 アポカリプス

さらに、B. WilkieとM. L. Johnsonの著書*Blake's Four Zoas : a Design of a Dream*を参照し

て、「1 — 3、4 — 6、7 — 9 夜の3夜づつからなる積み重ねであるともかんがえられよう」とも述べている。しかしながら、この議論に関しては原稿への加筆や入れ換えなど様々な問題が絡んでいるために明確にするには時間を要するようである。

ところが、この作品のEmanation〈女性なるもの〉に注目するならば、『四つのゾア』は興味深いものとなるのである。そして、特にここでは先に述べた最初の題名 *Vala* の原稿をもとに述べていきたい。

「第1夜」は人間アルビオンが、西方にある父なる力であるサーマスが分身イーニオンの嫉妬によって分離することによる墮落からはじまる。スペクターと称する理性的分身も誕生し、イーニオンの方は生成する世界の大地なる母となる。この時サーマスは水を司るので、大地の‘contrary’と言えるのである。そして、‘circle of destiny’（運命の輪）を完成させるが、それがウルロ（Ulro）という世界になるのである。ここでは、円環的世界をウルロと見ているわけである。こうして『四つのゾア』はそのウルロという世界からの脱出の物語として始まることになるのである。サーマスとイーニオンの結びつきからロスとそのエマネーションであるエニサーモンが生まれるが、この2つは後に結婚をするので、近親相姦ということになるのである。ここに1つの混沌の世界が見うけられる。

「第2夜」では、ルヴァのエマネーションであるヴェイラが自分自身の存在が判らなくなり、自分がルヴァのエマネーションであることを忘れてしまうのである。本体は想像界である永遠界の中にあるのであるが、この夢の世界においては自分の存在さえも判らないものとなっているのである。

「第3夜」は、ユリゼンの墮落とその支配を中心に語られている。人間アルビオンは眠りにつくときに理性の存在であるユリゼンに支配を委ねるので、ユリゼンは自らを神と呼ぶことになるのである。物質的な世界が支配することになる。ミルトン（John Milton, 1608-74）の *Paradise Lost*（1667）におけるセイタンと同様、ユリゼンにとっては墮落も英雄的な企てであると言えるのである。この間、ユリゼンのエマネーションであるアヘーニアは奈落の底へとどんどん落ちてゆくことになるのである。その他のゾアたちも己のエマネーションと分裂し、墮落の極みともいえる世界がやってくるのである。ユリゼンという1つの存在のために総てが混沌としてしまうわけである。

「第4夜」ではブレイクがNon Entityと呼ぶ空虚の世界が描かれている。「死のような無限」（the deathful infinite）であり、「非存在」（Non Existence）とも呼ばれている、天地創造以前の「無」の世界なのである。この空間は女性の子宮を思わせるものではあるが、何も生み出さない不毛の世界なのである。人間は神の影の存在としてのスペクターとして描かれているのである。つまり、人間の内なる4つのゾアもまた形を持たない存在となっているわけである。もちろんそのエマネーションたちもまた不定形のものとなっている。*

「第5夜」は、『ユリゼンの書』の第7章を下敷きにオークの物語が展開されている。オークの円環と呼ばれる自然界の円環（運命の輪）が高次元へと発展することなく、陰うつな状態を低迷することになる。そこでユリゼンは“the Mundane shell”と呼ばれる現世的殻の世界を築こうとするのである。そして、「第6夜」で、*Paradise Lost*のセイタンのように世界を見て廻るのである。そのためにユリゼンの見た世界は限定された世界となり、閉鎖的な状態が生まれることになるのである。一方、ロスのエマネーションであるエニサーモンは絶望の中において、オークを誕生させるが、ロスはオークが後に己を滅ぼすことを悟り、岩に縛りつけてしまうのである。もちろん、プロメテウスとオイデプスの話が土台になってはいるが、ブレイクの最終的なヴィジョンには親子の対立はない。ギリシャ神話はブレイクにおいては墮落の世界として語られるからである。ところで、そんなロスの行為をエニサーモンは哀れに思い、絶えず嘆くことになるのである。しかし、ユリゼンの支配する冷酷な世界の中で、ロスはオークを岩に縛りつけたことを悔い、心はエニサーモンと一つになるのである。

「第7夜」にはa稿とb稿があり、どちらが先に書かれたかなどの諸問題があるが、一般にa稿とされる“Then Urizen arose”で始まる原稿では、ロスとユリゼンの和解が描かれている。また、ロスとスペクターとの結合によりこの物語の頂点に達するのである。ロスとユリゼンの和合は両者の墮落を更生の方向へと導く大きな原動力となるものである。一方、サーマスのエマネーションであるイーニオンは墮落からの解放の希望を持ち、覆いとしてのヴェールではなく柔らかな絹の織物を織る新しい女性たちが産まれる。その中で、ロスは自分とユリゼンを結び付けたのがオークであり、しかもオークがエニサーモンが生み出した者であることに気付き、震えるのであった。

「第7夜」b稿はa稿に比べてきめは粗いが、この物語の構成上非常に重要な箇所である。オークがキリストのように、あるいは、プロメテウスのように磔刑に処せられる場面が中心であるからである。そしてこのb稿は「第8夜」へと引き継がれ、「黙示録」と同様にジェルサレムの姿が現れるのである。ユリゼンの戦いからセイタンが生まれ、ヴェイラはレイハブとなってユリゼンに打ち勝つ。そして「第9夜」でいよいよ人間の目覚めが始まり、アポカリプスとなるのである。最終的にはキリストがロスとエニサーモンの前に姿を現し、二人の魂を肉体から解放するのである。

以上のことをまとめるならば次のようになる。

ZoasとEmanationsを中心とした『四つのゾア』の構成

「第1夜」 人間Albionの墮落（Tharmasに対する分身Enionの嫉妬）

LosとEnitharmonの誕生（近親相姦）

「第2夜」 LuvahとValaとの分裂

- 「第3夜」 Urizenの墮落（自らを神と称する）とAhaniaの墮落
「第4夜」 Non Entityと呼ばれる世界
 (the deathful infinite, Non Existence)
「第5夜」 Orcの誕生とUrizenの支配する冷酷な世界（LosとEnitharmonの嘆き）
「第6夜」 UrizenのSatan化
「第7夜」 <a稿> LosとUrizenの和解、Losとspecterの結合
 Enionの墮落からの解放、Enitharmonの存在性の回復
 <b稿> Orcの磔刑
「第8夜」 Jerusalemの出現（Satan誕生、ValaがRahabとなってUrizenに勝つ）
「第9夜」 人間Albionの目覚め、キリストの出現

（四）

この作品の最初の題名がヴェイラという名で始まっていたことを思い起こすならば、少々この作品でのヴェイラの役割は希薄なものといえるかも知れない。しかしながら、彼女は最初の段階では人間アルビオンを夢へと誘う自然の存在なのであり、4つのゾアのうちのルヴァ（すなわちオーク）のエマネーションであることを考えるならば、きわめて重要な存在と言えるはずである。ところが、「第6夜」、「第7夜」 a稿にはその名前すら出てはこない。そして、「第7夜」 b稿で再び語られるときには“Shadowy Female”という名で登場するのである。これに関して土屋繁子氏は、「第9夜」で間奏曲風に再びヴェイラの庭での黄金時代の夢が語られるとき、その庭で彼女はサーマスとイーニオンとを幼児に変身させて円環的時間の維持を図っているが、ヴェイラはもはや全編を統一出来る枠ではない。そこで題名は『ヴェイラ』から『4人のゾア』に変えられ、「九夜からなる夢」という副題は削られ、「古えの人間の死と審判」という副題の前半の部分も「古えの人間の死と審判における愛としつとの苦しみと具体的になった」と述べている。ただ言えることはブレイクは当初ヴェイラという存在をかなり強く意識していたということである。

たとえば、『経験の歌』における“The Sick Rose”の薔薇は「理性の時代」の陰で病める女性的な存在であり、ヴェイラという名前が与えられる前の姿であったと言えよう。また、ミルトンの*Paradise Lost*第2巻でのセイタンから「罪」という女性が分かれたことや、さらにその結果「死」というものが生まれたことはおおいにブレイクの予言書に影響を与えたことは確かなことである。初期の予言書『アヘーニアの書』ではユリゼンから生まれたアヘーニアをすでにブレイクは「罪」と称しているのである。この『4つのゾア』においてもゾアたちはそれぞれエマネーションとスペクターに分かれることでもう一段階進んだ分裂すなわち墮落を経験することになるのである。エマネーションは感情的な存在であり、スペクターは理性的で主観的な存在である。そしてこれらが争いあったり、近親相姦をしながら墮落へと向かうのである。そしてやがて4つのゾアたち

が統一を図ろうとするとき、人間アルビオンは眠りから目覚めるのである。ブレイクの〈女性なる分身〉への執着はやがて予言書『ミルトン』を経て『ジェルサレム』へと続いていくことになる。初期においては名前のない女性らしき存在であったものが、やがて4つのゾアのエマネーションとしてそれぞれ名前が授けられ、やがて作品の名前ともなる人間アルビオンのエマネーション“ジェルサレム”へと発展していくからである。天地創造以来、人間は男と女に分離したことによって、墮落がはじまったが、その両者が一つになることで人間は繁栄してゆくわけである。ただしブレイクのエマネーションはヴィジョンの世界でのことであり、聖書の「黙示録」を彼なりに解釈したものといえるのである。ただ、N. フライが『『4つのゾア』の「第9夜」における創造力の途方もない爆発に匹敵するものは英詩のどこにもない』と述べたように、『4つのゾア』という作品はブレイクの予言書への意気込みが窺え、彼の最終的なヴィジョンをそれとなく覗かせてくれるものなのである。ブレイクのヴィジョンの成り行きは、最後には必ず人間アルビオンが統一され、全体性を回復し、目覚めなければならないからである。このときにゾアとその女性なる分身であるエマネーションたちが墮落を繰り返しながらも、結合してゆくのである。そしてこの統合は男性なるものが優性になってもいけないし、女性なるものが劣性になっても実現されないのである。両者が同じレベルに達した時に初めて実現される姿なのである。『天国と地獄の結婚』(*The Marriage of Heaven and Hell*, 1793) の中で、

Without Contraries is no progression. Attraction and Repulsion, Reason and Energy, Love and Hate, are necessary to Human existence.

対立のないところに進歩はない。牽引力と反発力、理性と精力、愛情と憎悪は人間の存在に必要なものなのだ。

と述べられているのは同レベルの対立における進歩を指しているものであり、ブレイクの最終的なヴィジョンにおけるゾアとエマネーションの結合を指しているともいえるのである。ブレイクの言う〈結合〉とは二つのものが融合して一つ一つの存在が混沌としてしまうものではなくて、あくまでも、彼が版画の世界で描いたようにそれぞれの存在が輪郭を持つことで個性を維持していたように、個々の存在が明確であることが前提なのである。そんな意味で、ブレイクは、『天国と地獄の結婚』という作品で、‘contraries’が目ざす結合を敢えて“marriage”と名付けたのである。それゆえに、彼の予言書の対立は、常に〈男性なるもの〉と〈女性なるもの〉によって描かれることになるのである。

〈参考資料〉

〈A〉 FOUR ZOAS & THEIR EMANATIONS

Zoas	Their meanings	Emanations	Their meanings
Urthona (or Los)	Imagination (Friendship)	Enitharmon	Spiritual Beauty (Inspiration)
Luvah	Emotions (Love)	Vala	Natural Beauty (Nature)
Urizen	Reason (Hunger)	Ahania	Pleasure (Sin)
Tharmas	Senses (Body) (Lust)	Enion	Generative Instinct (the Earth Mother)

〈B〉 “THE DIVINE IMAGE” & “A DIVINE IMAGE”

The Divine Image.

To Mercy Pity Peace and Love,
All pray in their distress :
And to these virtues of delight
Return their thankfulness.

For Mercy Pity Peace and Love,
Is God our father dear :
And Mercy Pity Peace and Love,
Is Man his child and care.

For Mercy has a human heart
Pity, a human face :
And Love, the human form divine,
And Peace, the human dress.

Then every man of every clime,
That prays in his distress,
Prays to the human form divine
Love Mercy Pity Peace.

And all must love the human form,
In heathen, turk or jew.
Where Mercy, Love & Pity dwell,
There God is dwelling too.

A DIVINE IMAGE

Cruelty has a Human Heart
And Jealousy a Human Face
Terror, the Human Form Divine
And Secrecy, the Human Dress

The Human Dress, is forged Iron
The Human Form, a fiery Forge.
The Human Face, a Furnace seal'd
The Human Heart, its hungry Gorge.

〈テキスト〉

The Poetry and Prose of William Blake. Edited by David V. Erdman. Comentary by Harold Bloom. N. Y., Doubleday, 1965.

The Poems of William Blake (Annotated English Poets). Edited by W. H. Stevenson. Text by David V. Erdman. London: Longman, 1971.

Blake: Complete Writings with variant readings. Edited by Geoffrey Keynes. London: Oxford, 1979.

William Blake: Songs of Innocence and of Experience. Ed. G. Keynes. Oxford U. P., 1982.

William Blake The Marriage of Heaven and Hell. Ed. G. Keynes. Oxford U. P., 1985.

The Poems of John Milton. Edited by John Carey and Alastair Fowler. London and New York: Longman, 1980.

〈参考文献〉

土屋 繁子 『ブレイクの世界－幻視家の予言書』研究社、1978.

『ヴィジョンのひずみ－ブレイク「四人のゾア」』あぼろん社、1985.

Frye, Northrop. *Fearful Symmetry: A Study in the Sources of William Blake*. Princeton Univ. P. Fourth Printing, 1974.

Rain, Kathleen. *William Blake*. London: Thames and Hudson. 1988.

Damon, S. Foster. *A Blake Dictionary—The Ideas and Symbols of William Blake*. Revised Edition with a new Foreword and annotated bibliography by Morris Eaves. Published for Brown University Press by University Press of New England. Hanover and London, 1988.

William Blake. ウィリアム・ブレイク展パンフレット。1990年9月22日～11月25日。上野国立西洋美術館にて。

The Greek New Testament. Edited by Kurt Aland, Mathew Black, Carlo M. Martini, Bruce M. Metzger, Allen Wikgren in cooperation with the Institute for New Testament Textual Research, Münster/Westphalia under the direction of Kurt Aland and Barbara Aland. United Bible Societies. Third Edition (Corrected), 1983.

The Holy Bible. Authorized Version Published in the year 1611. With an introduction by Alfred W. Pollard. Oup, Oxford Kenkyusha, Tokyo, 1985.

『聖書』日本聖書協会 (JBS) 1980.